

「遠隔医療」と「メディカルミュージアム」 二大施策で医師不足解消に挑む。

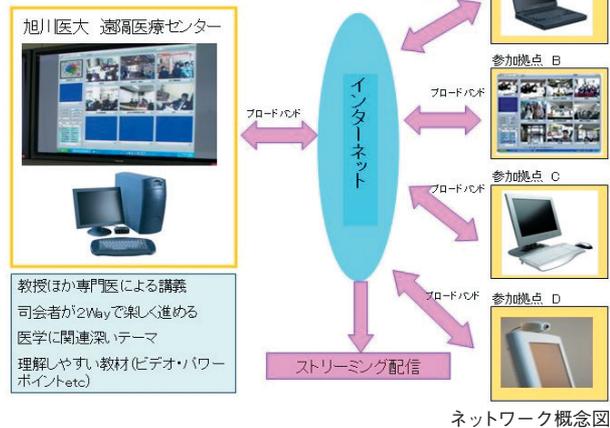


講師と司会者の二人三脚で授業は進行していく



センター側のモニターには参加者の様子が表示される

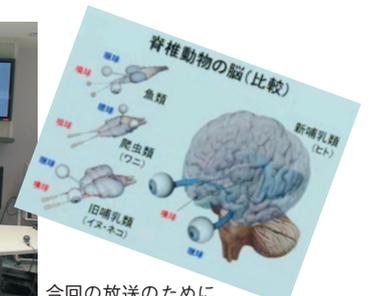
北海道メディカルミュージアム



ネットワーク概念図



放送中のセンターの様子



今回の放送のために書き起こされた教材も多い

救急車のたらい回しが毎日のように報道され、妊婦が赤ちゃんを産む場所にも困るほど、日本の医師不足は深刻化している。そんな中、旭川医科大学では、ICT技術を活用した施策で医師不足の解消に挑戦している。同じ設備を利用しながら、まったく異なる効果をあげている、「遠隔医療」と「メディカルミュージアム」である。その内容と効果とは…？

大学にいたまま、遠隔地の患者を診る。
遠隔医療センターをいち早く設置。

日本の医師不足について旭川医科大学吉田晃敏学長は「すでに限界を超えていますよ。産科・婦人科のない病院が当たり前になり、病理医のいる病院はほとんどないに等しいです」と語る。

それを打開するために吉田学長らが始めたのが、高速デジタル回線を活用した「遠隔医療」である。テレビでも紹介されているので見た方もいるかもしれないが、離れた病院にいる患者の状態を、別の病院にいる専門医がインターネットとパソコンの画面を通じて診断し、治療を行うものである。眼科が専門である吉田学長は、この方法で多くの患者を治療してきた。特別なスキルは不要で、患者と離れていても対面しているのとまったく同じように検査できるという。医師が実際に動くことを考えれば、時間は大幅に短縮され、より多くの患者に対応できる。

もちろん、手術となれば患者さんに旭川医科大学まで来てもらうが、主治医の先生方や家族は地元で済ませ、パソコン画面で手術の様子をつぶさに見ることができる。それを見ながら、吉田学長から患部の説明や術後の注意事項などの指示を受けるのだ。

この方法は眼科だけではなく、あらゆる診療科で応用できるという。特に、患部を肉眼や顕微鏡で見て病気の原因や状態を判断する病理医は、日本医療のアキレス腱と言われるほど不足しているが、この方法をとれば、遠隔地に病理医がいなくても、大学病院などの病理医に映像を送り手術中に判断を仰ぐこともできるのだ。

まさに、近未来的医療なのである。旭川医科大学では全国に先駆けて、遠隔医療センターを整備し、2000年より各診療科で実施している。

医師を増やすための積極策として「北海道メディカルミュージアム」を開設。

この遠隔医療のノウハウからもう一つのアイデアが生まれた。それが「北海道メディカルミュージアム」である。これは、医学、医療、看護学、その他の周辺教養をネット上の博物館に収めて、地域の住民がいつでも自由に情報を見られるというものだ。

「当初は旭川市とその周辺の1市8町のためのプランでしたが、北海道教育委員会が道立高での医進コースカリキュラムを検討する動きとも合致して、新しい可能性が生まれました。それは『北海道メディカルミュージアム』を介して北海道の高校生に医学の情報を伝え、北海道の医科大学に進んでもらうというものなのです」と吉田学長は語る。

遠隔医療があくまでも医師不足を補うためのパッシブな手法だとすれば、こちらは実際に医師を増やすためのアクティブプランである。この実際の様子は「北海道メディカルミュージアム」のサイトに映像で紹介されているのでご

覧いただきたい。

医師や教授が講師となり、遠隔医療センターが放送スタジオになる。講師たちの話は各地の拠点に集まった高校生にインターネットを通じて送られ、授業が進んでいく。高校生が対象のため、話は身近な話題から入っていくが、高校の授業ではけっして受けられない高度な内容にわたっている。なにしろ実際に最前線で働く人が講師だから、話がリアルで説得力がある。教材も工夫されていて、面白いし、わかりやすい。生徒側にもWEBカメラが設置されているので、講師は生徒の様子も見えるし、その場で質問することもできる。これまでに、糖尿病、皮膚ガン、視力低下、脳卒中など多様なテーマを取り上げ、大きな反響を呼んでいる。

現在は北海道教育委員会の方針で、道内の8高校を対象にしているが、いずれは中学校や小学校なども視野に入れ、小・中・高そして医学部教育と一貫した教育の可能性を考えていきたいというのが旭川医科大学の考えだ。「まず医学や医療に興味をもってもら。次に医科大学を目指すためのモチベーションを図る。受験するための情報提供も行う。そうやって、少しでも若いうちから医師の卵を育てていけば、医師不足の解消の決め手になると考えています。もちろん、医師を目指す方だけではなく、一般の人にも正しい医学知識を提供していく予定です」と吉田学長も自信をもっている。

近い将来「北海道」の文字が消えて「日本メディカルミュージアム」が誕生するかもしれない。国民としては大いに期待するところである。

●担当者より

プロジェクトには手ごたえを感じています。ぜひ見守ってください。



高校生に医学の話をするためには、わかりやすく、かつ面白い教材を用意する必要があります。今回のAJOSCさんのご支援は主にこうした教材の作成に使わせていただきました。現在は年2～3回ですが、できれば定期的に行っていきたいと考えております。医師不足は国民全員に関わる問題です。今後ともご支援いただければ幸いに存じます。

国立大学法人 旭川医科大学 学長 吉田晃敏さん